

教説の特徴 第一

上人の光明主義伝道は、聖者御遷化（大正九年十二月）直後より活発に行なわれ



桐生光明会別時念仏三昧会
(昭和八年三月、桐生 浄雲
寺。栗田参治朗氏蔵)

ているが、昭和時代にはいつて、特に熱を加えられたもののように見受けられ、講話の筆録などもその頃のものが多い。筆録類を通読して先ず感ずることは、上人のみ教えには、時局に便乗あるいは迎合されたものは全くない、ということである。この点は、上人の教説の、一つの特徴であると思われる。

大正末期から昭和初期の時代は、今さら言うまでもなく、後日の日本の、悲劇の序曲が奏でられた時期にあたっている。すなわち、大正十二年(三九)関東大震災、同十四年治安維持法公布・軍事教育を中学校等へ実施、昭和二年(二七)金融恐慌・山東出兵、同三年第二次山東出兵・濟南事件・張作霖爆死事件、同五年浜口首相狙撃事件、同六年満州事変、同七年上海事変・五・一五事件、同八年国際連盟脱退・京大滝川事件、同九年満州国樹立、同十年天皇機関説問題、同十一年二・二六事件・日独防共協定……と日本史年表の中から主な項目を拾い出して書き連ねるだけで、私たちは暗い時代を想起することができる。そして同十二年(三七)七月七日、ついに日華事変が始まり、上人は、同月二十六日、御遷化になったのである。

この暗雲低迷の時期において、最後まで自己の主義・主張・信念を曲げなかった人々も、勿論あったわけであるが、世の大方の学者・思想家・宗教家は、いわゆる国策に便乗、または迎合した。特に宗教家の中には、無批判に時局に



檀王法林寺別時念仏三昧会
(昭和十年十一月、京都)

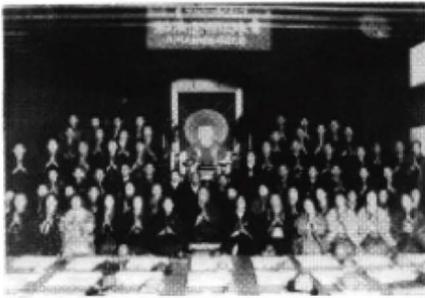
おもねる者が少なくなかったのである。この間にあって、上人は、弁栄聖者から継承せられた光明主義の真髓を説いてやまれなかった。上人の主張は、常に変らず、実に永遠の真理を説示せられた、と考えられるのである。

因みに、時流におもねることのなかった上人を物語る、エピソードが伝えられている。

昭和十年ごろのことである。軍国調が盛んになって、そろそろ宗教界にも圧迫が加えられ、わが国の宗教を、神道一本に統一しようという運動がすすめられていた頃、当時、大蔵省銀行局長で、将来、蔵相を約束されていたという大久保偵次氏が、戒浄上人にお会いしたいということ、橋本徳三郎氏と徳岡氏が御自坊に案内された。大久保氏曰く、「私は大蔵省に奉職しているのですが、大蔵省は日本の国の財政を司るところです。官吏は陛下にお仕える立場ですが、陛下をやはり現人神あまのひとがみとして仰ぐ立場にあります。陛下以外の神様、仏様を信ずるということはいかかなものでしょうか」と、質問のような形で問いつめた。もつとも大久保氏は、信仰の大切なことを感じていた人で、立派な方がおられたらぜひお会いして教えを受けたい、という希望をもっていたというから、別に上人をやりこめるという考えはなかったようであるが。上人は「今の陛下がお手本とされているお方は明治陛下でいらっしやるとうかがいますし

(35) 橋本徳岡氏稿「笹本上人
と橋本徳三郎」一〇・光明五
一三号参照。

九州支部結成記念別時念仏三
昧会(昭和十一年一月、鳥栖
光明会館)



た」大久保氏は「そのように私もうかがっております」上人「その明治天皇様
が御製に「朝な夕なミオヤの神に祈るなりわが国民を護りたまえと」とおうた
いになっておられますが、そのミオヤを私共は信じお慕い申しているのをごさ
いますから、どうぞ御安心を」とおっしゃって、そのミオヤの神こそ大ミオヤ
である、と説明された。大久保氏は、返す言葉もなく、お話に聞き入り、笑顔
で感謝のうなづきをしていた、という。⁽³⁵⁾

教説の特徴 第二

次に上人は、そのみ教えにおいて時代の苦悩を克服せられた、ということが
言える。ここに時代の苦悩を克服されたというのは、現代という信仰上の障害
の沢山ある時代の悩みを克服されたということであって、一言にしていえば、
信仰の困難性を解決せられた、ということである。

上人は、「現代は信仰上、実に困難な時代であります。内からも、外からも、
信仰を破壊するものばかりであります」といって、「信仰を破壊する外からの力
(唯物論・精神病学)のごときは、麩でつくった槍のようなものであるが、内から
信仰を破壊する力(現代自然科学の立場を依り所とした大乘非仏説等を含めた仏教の歴



井栄聖者十七回忌報恩別時會
(昭和十一年八月、諏訪 唐沢
山阿弥陀寺)

(36)能見寿作氏稿、人中の獅子・戒浄上人・「心の華」所収参照。

(37)「笹本戒浄上人しのびぐ」三二頁。

「史的研究は、鋼鉄のように鋭く手強うございます」と、述べておられる。すなわち、上人は、宗教家以外の外部から信仰を破壊し神を否定する唯物論、および三昧中に姿在す神に遇うという体験は、精神病的な現象なりとする意見を警えて、魅でつくった槍のように脆くて弱いといい、内から信仰を破壊する力、すなわち、大乘非仏説、經典は後世つくられた文学的創作なりとする非仏説論を含めて、報身の妙色相好身は真実在の仏で釈尊の真実説であるということを証拠立てるべきものがないという仏教の歴史的研究は、手強くて、鋼鉄の槍のように鋭く、これに対抗するのはなかなか容易でない、と言っておられるのである。⁽³⁶⁾

そして、信仰を破壊するこれらの力に、どのように対抗するかについて、次のように述べておられる。

宗教は阿片であるという従来の医学的唯物論に対しては、「真実の自己」を以て説破することが出来ますし、その宗教によつて営まれる宗教生活は、陶酔である、という精神病学上からの論難に対しては、「無辺光」の教理と、四大智慧豊かにお具えなさつていらつしやいました井栄上人様の御事実によつて論破出来るわけでございます。⁽³⁷⁾

上人が唯物論説破の論拠とせられた「真実の自己」の教説は、全集中巻に収



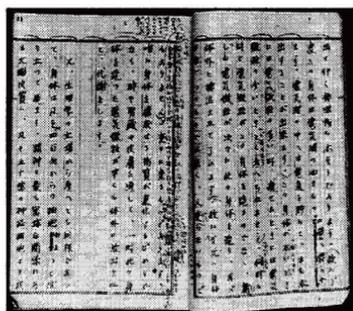
能見寿作氏

(38) B 6 版二〇六頁・光明主義文化研究所刊。「真実の自己」が出版されるに至るまでの経過など、詳細は全集中巻末尾の附記を参照されたい。

められているが、最初出版されたのは、上人の滅後、六年を経た昭和十八年十二月のことで、能見寿作氏が十数年にわたる苦心の末、ようやく上梓されるに至ったものである。⁽³⁸⁾本書は、講話の筆録であるけれども、上人の口調までも残して巧みに筆記されているので、上人の講話を拝聴したことのある者には、特になつかしい一篇である。その内容は、仏法の大海には信を以て能入と為す、永遠の生命、真実の自己、心の実相、阿頼耶識、心の本質に就いて、宇宙大の自己、の七章から成る。上人が多年研鑽を積まれた結果完成した、永遠の生命に関する教説であつて、これこそ真に上人独特のものである。

なお、この教説に対しては、弁栄聖者も「笹本の覚明は、平等性智を説いたものだ」と、印可いんかを与えられたのであつて、上人は、そのことを誇りとし、かつ自信を持つておられたようである。このことは、浄光師稿「父の思い出」(四)中に見える次の一節によつて知ることができる。すなわち、上人は、あるとき浄光師に対して「お父さんは決して一生、自惚や自慢は言わないつもりだが、唯一遍だけ言わしておくれ。それはお父さんの覚明わかみについて弁栄上人から、よくやったとお讚めの言葉を頂いた事だよ」と言つて、につこり、ほほえまれたという。

上人は、各地で開かれた五日乃至七日間の別時念仏会の講師をつとめられた



上人の朱筆入「真実の自己」
筆記録（伊藤清氏筆記）

が、多くの場合、夜間の連続講話として「真実の自己」を講述せられた。講話の仕方は、一方的に壇上から講演されるというのではなく、時に聴衆の誰彼に向って質問を試みたり、あるいは聴衆全員に、お湯のはいつた茶碗を持たせて、実証的に話をすすめられることもあった。

上人は、学生たちが筆記に忙しくて、その場で上人の話を味わい、事実と首つびぎで瑜伽論にいわゆる思惟しようとしめない態度をいましめて、「真実の自己は書いたからとて、わかるものではありませんよ」と、筆記を控えるように言われた。

「真実の自己」は、上人御在世中すでに出版の計画があつた模様であるが、なかなかその実現に至らなかつたものらしい。なお上人は、恒村京八氏宛昭和八年十一月十九日付書簡中に、「真実の自己」の刊行はしばらく延引してもらいたい旨、述べておられる。その理由として、

……従来の話にてハ「無我」に関する事、不足に御座候

釈尊の無我に関する御説法が云何なる事実を御指摘被為遊候乎を充分に複説したる後に非ずば「真実の自己」……それが「大涅槃經」にいはゆる仏性真我なる事勿論なれど……とは「無我」の御説法に背反せざる乎の俗説

を招くべき事、余りに明了に御座候⁽³⁹⁾



東海光明会別時念仏三昧会
(昭和十二年三月、愛知 三光
院)

(40)全集下巻四三〇―四三七
頁所収(本章口絵写真参照)。

とある。

また、上人には、「真実の自己」は、弁栄上人様から話をするようにと、いわれているのであるから、これだけは自分で書いておきたい、というお考えがあったようである。現在活字になっている「真実の自己」の内容は、上人としては、必ずしも満足せられるものではないかも知れないが、私たちにとつては、この一巻が遺されていることは、まことに幸いである、といわねばならない。

なお、「真実の自己」の原稿については、御多忙で、かつ高血圧のため健康を害されていたにもかかわらず、書き始められたものがあつたのである。現在、慶運寺に残されている上人直筆の「真実の自己」ノート(未完)⁴⁰がそれである。表紙に、

真実の自己 大般涅槃經ニ曰ク 仏性ハ真我。

昭和十二年一月十四日起稿

とあり、書き始められたのは、御遷化の半年前であつたことがわかる。それを途中でやめられたのは、健康状態の悪化による。

さて、前に述べた東北大学の千葉胤成博士のように(第四章(参照))、「真実の自己」の教説に対して、深い関心を示した学者は二、三にとどまらない。京都大学の佐藤幸治博士なども、その一人である。博士は、心理学の立場から禅を研究され

(41) 著書に「人格心理学」・「心理禅」・「禅のすすめ」などがある。

(42) 中外日報昭和三十七年一月一日及び六日付所載「禅を科学する」参照。

(43) 安田博幸博士の和訳されたものが、光明三二六号に掲載されている。

(44) 「真実の自己」の一節が英訳されて、世界の学界に紹介されるに至った経過については、河波昌・佐藤幸治両先生の杉田善孝師宛書簡(光明三二六号)、笹本至心先生稿「心理学者佐藤幸治博士の英文『真我の覚醒』に就いて」(光明五九三号)を参照されたい。

(45) 光明三八一・三八二・三八三号に転載されている。

たのであるが、上人の、いわゆる、真実の自己の説明は、久松真一博士などの説明に比して、非常にわかりやすく、つかみやすい、と述べておられる。⁽⁴²⁾ また、博士は、京大心理学研究室発行の専門誌「プシコロギア」第四卷第三号(一九六一年九月発行)に「真実の自己」の一節(真我の覚醒、同書六五―七二頁)を英訳して掲載しておられる。本文の前に付せられた英文の紹介文の中で、佐藤博士は、⁽⁴³⁾

……これまでの禅哲学の大家の抽象的論述に失望を感じているかもしれない西洋の人達にも、お上人の説明は、かえってよく理解されるであろうと信じている。ここに引用したのは、該書の第三章の中の一節であるけれども、私は今後もひきつづいて、本誌に、その他の章も英訳して紹介したいと思っている。

と述べ、つづけて上人の生涯を略述しておられる。このような形で、上人のお名前と教説の一部が、海外に紹介されたことは、大いに注目すべきであると思ふ。⁽⁴⁴⁾ また、博士は、「大法輪」(昭和三十八年七月号)誌上に、「心理学上から見た三昧の秘密」と題する文章を発表しておられる。⁽⁴⁵⁾ その中で、上人のことを「唯識と現代心理学とを行を以て媒介、新しい解明の道を開いた」人として紹介しておられる。また、「真実の自己」の中にみえる弘法大師・勝行上人・興教大師の三例の記述を要約して引用し、心理学者の立場から所見を述べておられる。

(46) 因みに、佐藤博士は、昭和四十六年十月、病氣のため急逝された。光明四四六号には、河波昌氏の「佐藤教授と私」と題する追悼文が載っている。



岡 潔博士

また、博士が「ブシコロギア」第五巻第一号に発表された文章（英文）を安田博幸博士が和訳されたものが、「数学者と念仏」と題し、「光明」三三九号（昭和三十八年十一月発行）に載っている。これは岡潔先生のことを述べておられるのであるが、大変、興味深い文章である。(46)

教説の特徴 第三

次に、弁栄聖者のみ教えをうけつぎ、光明主義を説かれた諸師の中で、上人こそは聖者の真精神、すなわち、光明主義中心道（あるいは成仏の直線道）を説かれた、と言えると思う。上人は、ほとんどすべての講話の中で、この中心道を説いておられるわけであるが、端的にお述べになったものとしては、「念仏の三義」(47)「見仏所期について」(48)「起行の用心」(49)「起行の用心に就いて」(50)「光明主義中心道」(51)などがある。

- (49) 全集 中巻所収。
- (50) 同右。
- (51) 全集 上巻所収。

上人によれば、人生の目的は成仏にある。成仏を実現させる道として、念仏三昧が説かれる。念仏三昧を實踐する上の心構えが起行の用心であるが、上人は一貫して見仏所期の念仏を力説せられた。この点が、上人のみ教えの光明主義中心道たるゆえんである。上人の主張は、弁栄聖者のみ教えに基づいておら



横浜光明会別時念仏三昧会
(昭和十二年四月、横浜 光明寺)

れることはいうまでもないが、また、上人自身の深い念仏三昧の体験と真摯な宗学研究の結果、到達された結論であったのである。

以上、教説の特徴として、第一に上人のみ教えには、時局に便乗あるいは迎合せられたものは全くなく、永遠の真理を説示せられたということ、第二に上人のみ教えは、時代の苦悩(信仰上のあらゆる障害)を克服されたものであるということ、第三に积尊・弁栄聖者の真精神である光明主義中心道を説かれたということ、の三点を指摘した。上人の教説に対して批判的な人は、あるいはその非社会性を云々するかもしれない。しかし、それは全く見当違いの批評と云べきではなからうか。時局を語らず、政治・経済を論じないというのも、宗教家としての一箇の見識である。それはともかく、上人の場合は、余事を語らず、一人でも多くの人に、光明主義の真髄を伝えておきたい、というお心でいつぱいであつた、と察せられる。宗教家の本来の使命は、修行と学問にいそしみ、その得たところのよろこびを、他にわかち与えることにあると考えられるが、この点よりいえば、上人こそは、宗教家の本分を全うされたお方である、と言わねばならないと思う。